か、それを……」

「まあ、いゝわよ、あれ位で」と、お光さんが、彼の諄い泣き言を打ち切つた。

「可哀さうぢやないか、あの娘に、罪はないんだもの」

「なあにネ」と、樫井が横から、口を出してからかつた。「今村のやつは、實は、自分からあの娘に、興味をもつてしまつたんですよ。それを、淺いところで濟まされたものだから、むやみに、腹が立つわけさ。君の口吻をまねして、ほんとに、僕、同情いたしますよ」

「畜生ッ」

「あはゝゝゝ」

「おい、高すぎるぞ、聲が」

「さう〳〵、まだ太田が、來るはずだ」

「今のは、罪つッぽいけれど、あの方の口ならば、どんな辛辣にやつてもかまはない」

「來る時分だぜ、やがて」

「ひつこめ、ひつこめ」

いたづらな覺もの達は、さん〴〵いひたいことをいひ囃して、それぞれ皆、溫室の蔭と植物の葉の中

に、その首を沈めこんだ。

誰やらそッと、燐寸を摺つて、煙草をのみかけたけれど、仲間の者に低聲で叱られて、あわてゝ揉み消してしまつた。

花櫛

棕櫚の葉の闇は二十分間ほど沈默をつゞけてゐた。誰か、欠伸をするやうな聲を立てゝからまた五分間ほど戰ぎもしなかつた。

さうしてゐる間は、別莊の裏にあたる海の音が眠氣を誘ふやうな諧調をもつて聞えてくる。小蒸氣のエンヂンの音が、その暗い海の聯想をよぶ。

「來ないわね、なか〳〵」

お光さんはたうとうしびれを切らして、第一に溫室の蔭から腰をのばしてしまつた。冷たい玻璃板へ息が曇つてゐるやうに秋の特有な星雲が空に夜更けてゐた。

「ねえ諸君、まさか、木乃伊取りが木乃伊になつてゐるのぢやないだらうね」

「何とも知れねえぜ、かう遲いところを見ると」

彼女が立つと、みんな、待つてゐたやうに、一齊に首を伸ばした。柊欄の葉の中から、南洋鬼蔦の中から、シヤボテンの中から、蘇鐵の中から。

「トム。見ておいでよ」

「斥候？」

「あ。そしてね、もし太田がいゝ氣もちになつて、こつちの約束を忘れてゐるやうだつたら、人のゐない所で、お尻ん抓つておやりよ」

「そりや可哀さうだ」と、誰か笑つた——

「そんな事をしなくつても、チラと、おめえの姿を見せてやれば氣がつくだらうぜ。プリンス、頼まあ」

「それだけか」と、トム公の影は海藻の中を泳ぐ縞鯛のやうに、ぴち〳〵と、正確な針路を探つて、青い庭園の闇をわけて行つた。

別莊の日本間には、どこの座敷にも灯明がはいつてゐた。が、そこには客のすがたはなかつた。噪音を辿つて、トム公は洋館の窓から客間をのぞいてみた。

そこには、濁りきつた空氣と噪音を入れたガラス箱みたいに不透明である。泥酔した外人、すれッからした通辯、藝妓ガール、賓客も主人公側のものも、けじめなく踊り疲れ、飲み疲れて、長椅子の隅や彼方

こつちに、とぐろを卷いてゐるのだけがわかる。

日本人も幾人かゐたが、騎手の太田だけは見えなかつた。歸つてしまつたとすると、お光さんやみんなずゐぶん馬鹿な目を見るわけだ。

「どうしたんだらう？」

トムは窓を離れた。そこは、十歩を出ると本牧の海である。波打ぎはから咽せあがる汐の香が白く燻つてゐる。洋館の屋根の風車は勢ひよく旋つてゐた。

「日本間の方へ、茶を喫みに行つたのかも知れねえな。さうだ、きつと、さうだ」

裏庭の海べづたひに、彼は歩き出した。すると、その洋館と日本座敷とをつないでゐる橋廊下の上にぼんやりと、海をながめてゐる雛妓のすがたがあつた。トム公の影はすぐに隱れてゐた。

雛妓の影もそこから消えた。

いつのまにか、二人の影はひとつになつて、海の方へ斜になつてゐる芝生の蔭にかゞみこんでゐた。それは豆菊だつた。

「兄さん、おつ母さんは、どうしたんでせうね」

「あれつきりだよ。おら、一昨日の晩、西戸部から逃げ出して來たばかりだから、まだ行つて見る暇がね

えのさ」

「もう、行つちやいやよ、兄さん……」

「どこへ」

「おつ母さんの病院へ」

「自分のおつ母あのところへ行くのに、どうして悪い？」

「あそこには刑事さんが來てゐて、兄さんが行つたらすぐ捕まへられてよ。もしおつ母さんの耳にはいつたら、その心配だけでも、きつとおつ母さんは……」

と、袂を顏に當ると、摘み細工の花櫛が、前髪からふるへて落ちた。

「冷たい手をしてゐるなあ」

「行つちやいやよ、兄さん」

「ぢや、止すよ。……冷たい手だなあ、菊ちやん、おめえ子供のくせに、どうしてこんな、冷やッこい手をしてゐるんだい」

「どうしてだか、分らないわ」

「陽あたりへ出ると、消えちまひさうだな。おいらはこんなに丈夫なのに、どうして、おまへは弱いのだ

ちう」

「女だからよ」

「女だつて、そんなに細い女つて、あるもんか。こんどおつ母あが病院を出たら訊いてみよう。菊ちやんとおれとは、きつと父親がちがふのかも知れねえぜ」

「そんなことないわ、そんなことないわ」

賢い豆菊は、トム公よりは、そのほんとなことを知つてゐた。母がどんなにして自分たちを產んだか、また自分たちが、私生子といふ名であることも、また自分たちが生れるまへの、母が若さを濫費して來た行ひなども、ちら〳〵と耳にはいる人の話が、いつか豆菊の澄んだ心のなかに纏つて分つてゐた。その淋しいものが、豆菊の少女らしさをだん〳〵内氣な聰明にして來た。

「菊ちやんは、時々、この別莊へよばれて來るのかい」

「えゝ時々、千歲の女將さんや、姐さん達といつしよに」

「もうぢき歸るの？」

「まだでせう、お客樣たちが寢てしまはなければ」

「ぢや、後で又、こゝへ來ねえか。ふたりで唄はうよ」

「唄なんかうたひたくないわ。私、いろんな話がしたい」
「あ、話をしてもいゝさ」
「兄さんは一體、大きくなつてから何をするの？　おつ母さんは、これから先、どうして暮すの？　そして私は……。そんなことも、話したいわ」
「あ、太田さんは、歸つたかい。――騎手の太田さん」
「居たわ、今そこに」
トム公は、花櫛をひろつて、妹に渡してやりながら立つた。
「どこにゐる」
「夫人といつしよに、客間から出て行つたわ。きつと庭の四阿亭の方へ行つたんでせう」
「ぢや、後でネ」
豆菊の涙ッぽい眼をそこにおいて、トム公はあわてゝ前の溫室の蔭へ歸つて來た。
「ぢや來る！　きつと來るんだ」
彼の報告に、そこらの闇は又、人影をかくして、何げない夜の景色をゝのへてゐた。

カメラ

「眞面目ね、眞面目ね、いやよ、太田さんは」
さういふ夫人お楨は醉つてゐた。相手の醉の程度が不足なほど醉つてゐた。庭へ出て、騎手の太田と、腕を組んで、しどけなく夜露を漁つて來るのだつた。彼女と太田との對照は、ちやうど腰の長いアフリカ種の馬のそばに驢馬が寄り添つたやうであるけれど、彼女は、十分な滿足を感じ得てゐる。
「あんた狡いわ、今夜は醉ふといつておいて、私にばかり飲ませて、そのくせ、醉つてないんだもの」
「それや無理ですよ、奥さん、騎手つてものは、朝から夜まで、派手なものにつゝまれ通してゐながら、それで、夜更かしも酒も、食べるものすらも、始終神經質でゐなければならんのです」
「わかつてるわよ」と夫人は地を出して――「分つてゐるけれど、こん夜はいゝぢやないの」
「まだ、もう一競馬ありますからな」
「酒はのめない、夜更かしはいけない、女も何もなんて、そんなびく〳〵してゐなければならないものなら騎手なんて、やめつちまへばいゝのにさ。坊さんになつても、同じことだわ」
「まつたく、騎手生活なんて、はやくやめたいです。人氣者になるほどいやなものはありますまい」

「だから、この次の競馬には、賭けた方がいゝぢやないの」
「さうも行きませんな。はゝゝ」
「やつぱり、人氣者でゐたいんでせう」
「だから苦しむのです。それがなければ何も」
「むじゆんしてゐるわね、この人。――いゝわよ、どつちにしても、こん夜ひとばんは、きつと私につきあつてくれるのだから。ね、さういふ約束だつたわね」
「それやいゝですとも」
「なんだかうはの空だわね、この人は。よその奥さんを騙すやうには、私は、いかないことよ。ご承知でせうが」
「はゝゝ、騙せるあなたでもないでせう。ま、そこのベンチへ腰掛けませう、すこし草臥れました」
と、太田はくすぐつたい顔をしながら、ベンチのまはりを見廻した。お嬢は男の腕に拱まれたまゝ、投げるやうにからだを崩して、
「呆れたでせう」と、仰向いて、ちよつと理性めいたことをいつた。
「何がですか」

「だつて、高瀬の夫人であるくせに、こんな強要をしてさ」
「今の上流の奥さんたちは、そんなことは、一つの娯樂ぐらゐにしか考へてゐないでせう」
「ぢや、私ばかりぢやないのね。――だけれど太田さん、あんたいつたい、幾人ぐらゐ女のパトロンがあるの」
「幾人？　冗談ぢやありません、男のなら、ないこともないが」
「知つてゐますよ、私に隠したつて駄目々々。だからね、そんな者はみんなやめてよ、私が、三人分でも、四人分でも、力になつてあげるから」
女の執拗さがそろ〳〵太田を疲らしてきた。太田はかなりよいほどに生返辭をしてゐるのであつたけれど、彼女には、それが人氣者の偉さに見えた。そして今夜失望してゐる幾人かの女性もあるだらうと思ひながら、自分の幸福感を刺戟した。
「ね。ね」
その時、ぱッと、マグネシユウムのつよい閃光と爆音が、彼女を撲りつけたやうに驚かした。
彼女は、彈かれたやうにベンチから飛び上つた。とたんに、棕櫚の葉が手をたゝくやうに搖れて、あたりの闇が、笑ひ聲に騒いだ。

「？……」

夫人お槇の顏へ、もういつぺんマグネを與へたら、どんな表情をしてゐるだらうと思つて、お光さんや愚連隊の男たちは、止めどなく笑ひを交換した。

お槇は、ふるへてゐた。そこに硬直したまゝ、誰とはなく睨みつけてゐるのだつた。そのあたまのうへを、ふはつと、白くながれてゆくマグネの煙りが、太田の化身のやうに。そばにゐた太田はいつのまにかそこにゐなかつた。

「見ておいで！」

彼女は、こめかみをぴり〳〵させて、うしろを振り向くと、突然、ヒステリックな聲で怒鳴つた。

「どなたも！　みんな來てください！　惡いやつが多勢、邸宅の庭にはいりこんでゐますから。――爺やッ、三吉ッ、お客樣たちも來て下さい」

そして、危險を避けるやうに、溫室の周圍をばた〳〵と駈けめぐつた。

「諸君、お芝居はハネましたよ」

お光さんは、夫人の狼狽を冷笑しながら、小型なカメラをかゝへて、すばやく、庭園を横ぎつた。誰の足もはやかつた。――だがひとりトム公だけは、みんなが逃げる方角とは反對に、さつき豆菊と會つた裏

手の海岸の方へ駈けだした。

彼は、もういちどそこに待つてゐるといつた妹との約束にひかれたのだつた。然し、彼は尠からずそれを悔いた。座敷から、風呂場から、客間から、いちどに、吐き出されて來た人間は、彼ひとりを見つけて大げさに追ひ廻して來た。

一方が、海であるだけに、トム公は逃げ場を失つてしまつた。風呂番の男のたくましい腕が、まづ彼の襟がみをつかんで、外人だの、ガイドだの、召使だの、殆ど彼のすがたをつゝんでしまふほどの人群が、そこに度胸をすゑて坐つてしまつたトム公をかこんで、がや〳〵と騷いだ。

「この少年、ドロボウ？」

一外人の質問に、通辯はいつた。

「いゝえ、かんかん蟲」

「かん〳〵蟲？　あ、かんかん蟲？」

外人は、分つたやうな分らないやうな顏をして興がつた。主人の理平も來た。千歲の女將も來た。藝妓たちものぞきに來た。

「電話をかけておいたらうな、警察の方へ」

「はい、すぐ知らせておきましたから、もう程なく來るでせう」
「さ、お客様たちは、どうぞあちらへ。……いや何でもありません、コソ泥です。かんかん蟲のトムといふ小僧で、まいど、强請がしたり何かして、よくないやつなんで。……こらつ、今夜こそ、警察へわたしてやるぞ」
トム公は、默つて理平の顏を睨んだ。その高瀨の肩に、甘えかゝつて、何か、恂々ささゝやいてゐる女槇へ、何かいつてやらうかと思つたが、こゝではやめた。
「警察の方がお見えになりました。署長さんまで」
「署長も。——いやそれ程のことぢやないのに」
「電話をかけたものが、ひどく、あわてたものですから」
「まあよい〳〵。伊勢佐木署の保科さんならあとでお詫をすればいゝ。とにかく、こちらへ」
警官の提燈と、佩劍の音は、さういつてるまに、人々のうしろへ來てゐた。

富麿

「あはゝゝ、さうですか、何か非常なことらしい電話なので、自轉車をとばしてお見舞に來たわけです。

——がまあ、そんな小事件であつて却つておめでたいわけでした」
署長の保科勝衛は、高瀨理平と肩をならべて、もうほかの雜談などをしてゐるのだつた。だが部下の巡査は、その小さな一事件にも、職務の忠實を示し得るやうに、おそろしく嚴肅がつて、鉛筆のシンを舐める。
「こらつ、貴樣あ、かんかん蟲のトム公だな」
「一昨日、調べてもらつたばかりだぜ」
「でも一應は、住所年齡を聞くんぢや。年は」
「十四だい」
「住所は」
「忘れちまつたい」
「貴樣、署ではいッたぢやないか。——相澤町字和蘭陀横丁、俗稱イロハ長屋、千坂桐代長男——さうだな」
「おつ母あの名なんか、そんな、汚ねえ手帖に書くない。おつ母あは何も、警察に書かれるやうなことをしたことはねえぞ」

「署長、かういふ小僧です。實に手にをへんです」
「こんなのが大きくなつたら、さしづめ、吾々の飯の種ぢやらう。あはゝゝ」
「然し、法律といふものも不便ですな」と、理平が、署長の吸ひかけてゐる卷煙草へ燐寸を摺つてやりながら横口を入れた——
「こんなチビでも、いつぱし、大人以上の惡事を働いて社會を害するのに、十四歳では、それを懲役にすることができないのですか」
「まあ、こんなひどい不良は、八丈島の感化院へやるわけですがな。その感化院へやつても、どうも大した効果はないやうです」
「さうでせう、こんなのは、つまりもう先天的に、血のなかに、惡を持つてゐるのでせうからな」
「おい、連れてゆけ」と署長は無造作に顎をすくつて、
「僕はまだちと用事が殘つとるから、後から行く。何トム公のことは、武藤司法主任が何もかも知りぬいとるから、武藤君に委任すりやよい」
「ぢや、署長、ご迷惑でせうが」
と、理平が彼を客間へ迎へようとすると、さつきから、しげ〳〵と、トム公のすがたを見入つてゐた千

歳の女將が、そのトム公の腕をつかんで引きずり上げた巡査へ向つて、ていねいに、腰をかゞめた。
「あの、失禮でございますが、ちよつとお待ちくださいませんか」
署長と、高瀬とは、ふり顧つて、
「女將、なんぢや？」
「はい、この子のことで、すこし……」
「おまへが、かんかん蟲のトム公などに、何の用があるのか？」
「相澤町字和闌陀横丁、千坂桐代、さう仰言つたやうに存じますが」
巡査も、妙な顔をしながら、
「はあ、それがトムの母親にあたる者で、今、どこかの施療病院にはいつてるといふことです」
「もういちどお確かめ下さいませんでせうか。母親が千坂桐代——そしてトム公といふその子は、本名を富麿といひはしませんかしら」
「さ、それはどうですか。おい、トム。貴樣の本名はトムではなくて、トミか、トミ麿か」
その巡査の顏は見ないで、トムはぢつと千歳の女將のすがたをながめてゐた。女將も、彼の鼻すぢのとほつた顏だちに、自分の直覺をまちがひのないものと信じた。

「署長様、おそれいりますが、ちょつと、お顔を拜借させてくださいませんか」

千歳の女將と、署長の保科とは、そこを少し離れて、闇の中へ顔を突つこむやうに屈み合つた。

トム公――千坂富麿が、大隈伯のたづねてゐる千坂男爵のむすめの子にちがひないと囁やかれて、保科署長はびつくりしてしまつた。

それを、背なかあはせに、耳をすまして聞いてゐた高瀬理平が、度を失ふほど驚いたのは、なほのこと當然であつた。

鬻の疲れ

東洋の女、故國の酒――

惡い氣もちであるはずがない。

風車の別莊に罐詰にされた商策の捕虜たちは、理平のたくみな歡待に日を忘れて、出帆の朝の間際まで完全に、二日二晩を、そこで沈酔してゐた。

その間に、棧橋にある彼等の本船は、すべての積荷を終つてしまふ。一萬噸もある船腹は、不良品に充滿する。石炭は、看貫をごまかし放題ごまかして、どし〳〵と、その隙に積みこまれた。

貿易華やかなりしころ、巨富を攫んだ横濱成功者の多くは、さうした智謀に富んだ器であつた。――いよいよ惡辣な輸出戰の火ぶたが切られる日の前に、やかましい本船の頭株のヤンキイ達は、遠くは箱根、大森のあけぼの、新橋の花月と拉して行かれる。まだ〳〵、本牧の風車の下で、關内の安ッぽいお吉や、似て非なる龜遊の髪あぶらの香を嗅いで、うつゝを抜かしてゐるてあひなどは、至つて、馭しよいヤンキイであるのだ。

だが、オキチでもブタでも、とにかく、彼等の滿喫するに足る東洋肌のかひなに抱かれて、彼らが姫氏の國の甘夢にうつゝなき一夜こそ、港の埠頭は戰爭だつた。カンテラは棧橋を焦し、炭煙は棧橋に立ちこめてゐる。ボーラ吠え、石炭かつぎ怒鳴り、波止場人足さけび、かんかん蟲夜業にたゝく。何もかも夜明けまでと、微夜で、一萬噸にあまる船腹を、手品のやうに、不良品とごまかしで、征服してしまふのだつた。

ばうッ！　ばうッ！

出帆の朝。――あの色けのない本船の喉ぶとい汽笛の聲が、横濱の朝靄をゆるがすころになると、あつちこつちの遊仙窟から、それこそ、取るものも取りあへず、さいつたやうな、あわてふためいたヤンキイたちが、上は船長から下は火夫やコックにいたるまで二人曳きで押ッとばして、出帆五分前――二分間ま

へといふ、際どい所を桟橋の本船へ駆けつけてくる。

その時こそ、船乗りヤンキイの薄情さかげんがわかるし、開港場の女たちの、いと、あつさりしたものであることが歴然とする。

「この次は、サイベリア丸だささ」

呉の客を送つて、すぐに越の船の入港日を税關の前の掲示板で見ながら、よく戦つた白粉の女たちは、弱寒げに、ぞろ〳〵と、自分たちの巣へ歸つてゆくのだつた。

「や、ご苦勞、ご苦勞」

高瀬理平は、やつと一船かたづけて、ほつとしたやうに、腰をたゝいた。——その朝は、千歳の女將が姿を見せなかつたので、船の外人を送つてきた藝妓たちも、何となく、つぎ穂がなく、まじめに挨拶をして、それ〴〵の方角へ、俥の幌をかぶつて、歸つて行つた。

「旦那さま、旦那さま」

桟橋を出ると、すぐに、迎への馬車が理平の方へ寄つて來た。

「お疲れでございませう」

と、お槇は、一昨日の晩から、別人のやうに彼に親切だつた。こんな朝はやくに、彼を迎へに來ることだつて珍らしいのであつた。

「——朝は、だいぶ寒くなつたな。もう季節だとみえて、鯊釣の竿が見えだした」

「夜ふかしがつゞいたせゐでございませう」

「それもある。……あ。奈都子はどうしたね、醫者に見せたかい」

「あれから、ずつと、寝てをりますの。石川博士が毎日診察に來てくださいます」

「病名は」

「やはり神經性のものだらうと仰言るんですが」

「分らんのか。……熱は」

「三十八度前後……。ゆうべは、九度ぢかくまでありましたが」

「ふーむ」

「やつぱり、年ごろですから」

「肺ぢやあるまいの」

理平は、沈鬱になつた。眼の下の皮が、疲勞にたるんでゐた。

北仲通りの本宅へ、馬車はやがて着いた。支配人は、まだ事務所の電燈を鼻の先まで下げて執務してゐ

た。瀬戸の大火鉢にゆうべからの忙しさを語る吸殻がむせッぽい煙を漂らしてゐた。

「松下君、やすみたまへ」

「あ、お歸りで」

「だめ、だめ。此ッ方もへト〳〵に疲れとるから。話は、あとで聞かう」

あわてゝ、手を振つて、理平は奥の洋室へ逃げこむやうにはいつた。どつかりと、椅子のなかに體を投げこんで、

「珈琲」

両手を、後頭部でむすびながら、胸をそらして、

「熱く！」

と、いひ足した。

それを待つてゐる間に、彼は眉をしかめ出した。上の露臺だらう、朝からハーモニカを持ち出して、幼稚な、騒々しい音を、吹きちらしてゐる者があつた。

闖入者

おそろしく熱いコーヒへ、くちびるを近づけたゞけで、理平は、ふきげんに下へおいて、

「誰だ、あれは」

と、女中へ咎めた。

「ハーモニカですか。あれは、をとゝひの晩、千歳の女將さんと警察署のお方が預けておいでになつたトムさんです」

「トム公か。困つたやつぢやの」

「ほんとに、とんでもない者を預かつてしまひましたわね。警察へおいてくれゝばいゝのに」

と、お槇もいつしよに、眉をひそめた。

「だが、女將の證言がほんとだとすると、あれが、千坂男爵の身よりのものだといふのだから、さう分つてみると、署長も處置に困つとるんだらう……。おい、あの小僧に、トム公に、さういへ、病人があるんぢやから、そんなものを吹いては困るつて」

女中は旨をうけて、さつそく露臺へ上つて行つたらしいけれど、ハーモニカはやまなかつた。

理平は一睡したいのであつたが、それが氣になつて寢る氣にもなれなかつた。千歳へ電話をかけさせてみると、女將はきのふ東京へ行つてまだ歸つて來ないとのことで、結局、そこへも當りやうがなく、隣室へ寢床を命じて、横になつた。

讀みかけてゐた新聞にも、すぐに眼がつかれて、二三時間ほど彼はウト〳〵としてゐた。——すると隣室で、聞き馴れない來訪者の聲がひゞいた。

「ごじようだんでせう、君！　嘘をいッたつて、だめよ」

それは、男とも聞えるし、女ともうけとれるアクセントだつた。

「——居留守なんて、古手だわよ、第一、君、自身ですら、女中に居ないといはせておきながらこゝに居るぢやないの。然し、君だけぢや相手にならないですから、御主人に會はせてください」

「だつてほんとに今、主人は船のお客をつれて、箱根の方へ參つて、不在なのです」

應接してゐるのは、明らかにお槇だつた。けれど、來訪者の壓倒的な語調のまへに、何となくおろ〳〵してゐる風がわかる。

「誰だらう？」

と、理平は寢床の上に起き上つて、耳を澄ましてゐた。

「ホ、、」と、落着きすました笑ひ聲だ。笑ひ聲はやはり女だつた。「——今朝、棧橋からお歸りになつてから、こゝの御主人はまだ一歩も外へ出てゐないはずよ。君！　そんな嘘ッぱち、いくら並べても、認めなくつてよ。はやく、會はせたまへ」

「あなた。會はせる會はせないはとにかく、いつたい誰に斷つて、こゝへ、はいつて來たんですか」

「女中君が、嘘をつくから、家宅侵入を敢てしたのよ、君、訴へますか」

「……呆れましたね、なんていふ、あばずれでせう」

「けれど、君ほどは、あばずれでないつもりよ。その證明は後に立てます。とにかく、御主人を呼んでもらひませう」

「ゐませんよ」

「ゐます」

「ゐません」

兩女がいひ募つてゐるところへ、扉を押して、ひらりつと、はいつて來た者があつた。ポケットの口にハ！モニカを短銃のやうにのぞかせてゐるトム公だつた。

「お光さん」

「あ、トム公、おまへこゝにゐたの？」
「主人はすぐそこの奥に寝てゐるぜ、ゐないなんて、大嘘さ、おれが連れて來てやらう」
と、大股にあるいて、隣室の扉をぽんと足で開けた。すかさずに、支那服のお光さんは、彼につゞいて
その部屋の口から、
「御主人、起きて頂戴な」
と、覗いた。

征服

「誰だおまへは。やたらに人の居宅へはいつて、寝室へまで無断で來るやつがあるか。警察へいふぞ」
「結構ですわ」
と、お光さんは、椅子に倚つて、ほそい脚線を組みあはせた。
「けれど御主人、君は、私の用向きを聞かなくつてもいゝんですか」
「おまへみたいな婦人に、わしは、何の用件も持つとらん。いづれおまへは、女愚連隊とか、ハンケチ女
とかいふ、そんな類の者ぢやらう」

「さうよ、私は、ハンケチ女から成り上つた、女の愚連隊よ。しかし御主人、君もつい十何年かまへは、
港橋で眞ッ黒なパイスケを擔いでゐた石炭擔ぎぢやなかつたの」
「失敬なことをいふな。つまみ出すぞ」
「おもしろい、私が、つまみ出されるかどうか、トム公、そこで見物しておいで」
「あ、見てゐよう」
トム公は、二つの椅子を並べて、その上へ足を投げ出しながら、ハーモニカを弄んでゐた。
「——が、御主人、つまみ出されるといけないから、その前に、かんたんに私の訪問した好意だけを分つ
てください」
お光さんはポケットを探つて、まだ感光液のねばりさうな生々しい一葉の寫眞を出して、理平のまへに
突き出した。理平は、手もふれようとしなかつたが、ちらと見ると、顔いろをうごかして、思はず眼を奪
られてしまつた。
「どうですか、この寫眞は。……夫人、あなたもこゝへ來て見ないこと。たいへんよく撮れましたよ」
彼女は、この間の晩、その秘密な場面を盗まれたせつなに浴びたマグネシユウムの閃光を、今また、驚
愕の後頭部によみがへらせて、眼がぐら〳〵として來た。

「御主人、君は、買ひますか、買ひませんか、この寫眞を」

お光さんの笑靨は、だん〳〵に冷たく誘らしくなつた。

まるで、滅心したかのやうに、どすぐろい憤怒と、苦悶に、ぶる〳〵とそれを睨んでゐた理平は、いきなり彼女の手の物を引ッ奪くッて、

「買はう！　幾値だ」

と、言下にビリ〳〵と引き裂いてしまつた。

「お生憎さまです」

と、お光さんは皮肉な商人のやうに、わざと少し頭を下げて、

「それは、お賣りいたしませんわ、なぜかといへば、幾ら君の財力で買占を試みても、原板でない以上は何萬でも複製がきゝますからね。無駄ぢやないこと」

と、又隱しの中から、一葉の寫眞を出し示しながら、

「たとへば、かういふ、トリック寫眞でも作ることができるんですから」

理平はもうそれを奪つて、裂き捨てる勇氣さへ失つてしまつた。

その硬ばつた理平の顏と、慚愧そのものゝやうなお槇の戰慄とは、トム公の眼に、頗る愉快な對照であ

つた。トムは、椅子の上に輕く足を彈ませながら、その間に、ハーモニカの低吟を唇に弄しはじめた。

「もつと、ごらんにいれませうか。まだ、奈都子さんのもありますが」

「ゆるしてくれ、もう、たくさんだ」

理平は、兩手で、頭をかゝへたまゝ、たうとう屈伏してしまつた。

「金はいくらでもやるから、その原板を持つて來てくれんか」

「賣るならば、私は、輪出繪ハガキ屋のトリック師へ賣りつけてやつてよ。かういふ繪は、外國船の下級船員たちが、非常によろこぶもんですつて」

「だから、わしが買ふよ」

「いゝえ、賣らないといふんですよ。——ようございますか君！　私は、これを賣りつけに來たんではありません」

「ぢや、何だつて」

「夫人も、一言あつていゝでせう、君はこれを認めますか。騎手の太田との醜行を」

「え！　今いはうと思つてゐたんです」お槇は、乾いた唇をわな〳〵とさせて——「それはみんなトリックです。私の、何かの寫眞を盜んで、惡戲をしたんです、寃罪です」

と、終りの一句を、理平に向けて、訴へるやうに叫んだ。

「む、む、さうぢやらう。誰かの、悪戯にちがひない。おまへにとつては、まつたくの寃罪だらう。もしそんなものを、承知しながら流布するならば、警察の力を借りて」

「君たち！」お光さんは、平等に、ふたりを睨んで、その秩序のない泣き言に句点を打たした。

「そんな強がりや、見ッともない狎れ合ひはおよしなさい。その代りに、夫人の寃罪といふ点だけは認めて上げませう。場合によつては、この原板を無償で進呈してもいゝことよ。——だが、私の大事な用向きはこゝなのだから、こゝをよく聞いて欲しいの」

と、お光さんは、平調に澄まし返つて「寃罪といふことは、これほどに怖しいことでせう。だのに、夫人は、君よりももつと正大な、一人の勞働者を、寃罪に墜し放して、素知らぬ顔をしてゐましたね。——そのことは、私が連れて來た男の口からいはせませう。——黒眼鏡君、來て頂戴」

彼女が、扉の外へちよつと顔を出すと、瀟洒な巾着ッ切の常は、おとなしい笑ひをたゝへながら、

「ごめん下さいまし」

と、羽織の裾をはねて、一つの椅子を占めた。

夕坂越えて

トム公は愉快でたまらなかつた。ハーモニカを唾だらけにして、弄んでゐた。その間に、彼の希望してゐたことは、はき〳〵と片づいて行つた。

船渠の構内で、お槇の指環を竊盗した眞犯人が、龜田でなかつたことは、黒眼鏡の口から立證された。それを掏つた當人——黒眼鏡の常が、自分の口から述べることばだつた。お光さんは又、その證據として自分の手にある、金剛石の指環を見せた。

理平もお槇も、その後、龜田がほんとの竊盗者でないことは、うす〳〵感じてゐたのであつたが、さういふ階級の人間に、何らの同情も介意もしない富豪通有の冷淡さが、彼らにもあつて、いゝかげんに放念してゐたのである。然し、今はお光さんに、きびしい鞭をビシ〳〵と打たれて、その眞實のまへに、慚愧のあたまを下げずにはゐられなかつた。

「さつそく、龜田といふ人を、貰ひ下げます。實にどうも、何とも、すまない事ぢやつた」

「當然その人には、賠償する義務がありますわね」

「あります。その人の身の立つやうに考慮しませう」

「よろしい、誓つたことよ。――ではすぐ伊勢佐木署の保科署長を呼んで貰ひませうか。黒眼鏡は自首するさうです。つまり、寃罪をうけてはいつてゐる龜田と入れかはりになるんですから」

「さつそく、電話をかけませう」と、理平は唯々として、お光さんの命に服した。

署長、司法主任、ほか二三人、すぐに自轉車をとばしてきた。黒眼鏡はるゝとして、船渠以外の犯罪の事實までをそこで陳述した。それは、すこしも暗慘な氣分のない、明るい話をするやうだつた。

「仕立屋の身内か。ぢやいちど、手にかけたことがあるな」

「ごやつかいに成つたことがございます」

と、いふ風に柔順であつた。

「よろしい」

と、常の方を終つてから、

「檢事局の方へ上申すれば、龜田は、即日放免されませう。何、まだ未決監ですから、法曹界の人々に聞えても、問題化される心配はありません。こんな例はありがちな事です。――それからトム公の方ですが」

と、チラと、彼をしり目にかけて、

「鮮廳の警務部へ行つて協議した結果ですが、たとひ本人が、大隈伯のおたづねになつてゐる千坂家の身よりの者であるにせよ否にせよ、情實でこの儘、放任することはいかんさいふ意見なんです。で、一應は本署から彼の脱走した戸部の懲治監へ送り返してやることに決めました。どうぞ、それも御諒承を」

と、宣言的に、經過を告げて、すぐトム公の手くびをつかんだ。

「司法主任、ついでに、連れ歸つてくれたまへ」

「ちよつとお待ちください」

「何をしてゐるんだ君」

「彼はどこへ行きましたか」

「彼つて」

「黒眼鏡です、今の巾着ッ切です」

「？……」

「……便所ぢやありませんか。中折帽がおいてある」

と、理平がつぶやくのを、トム公は、横を向いて笑つた。そして、お光さんに、眼くばせをした。

「ゐるんでせう、見て來ますわ」

と、お光さんも、部屋の外を覗き廻つた。そして、ちらつと、支那服の裾の端を見せたまゝ、彼女もそれつきり歸らなかつた。もちろん、――金剛石の指環も、トリック寫眞も、その隠しにつッこんだまゝ。

× × ×

大隈伯の代理といふ人と、千坂家の家令といふ老人とが、紋付袴で、千歳の女將に伴はれて、横濱驛から大江橋のすぐまへにある千歳樓へはいつたのは、同じ日だつた。

女將は昂奮してゐた。一昨日の晩から何か非常な奇蹟にぶつかつたやうな驚きもあつたし、最高な善事のために自分を疲らしてゐるといふ滿足もあつた。

歸るとすぐに、しきりと、あつちこつちへ、電話をかけてゐた。高瀬家の番號も、警察署の番號もよび出された。――やがて程經て、金春の春太郎姐さんが、すこし、喩に泣いた痕を見せながら、豆菊の手をひいて、連れて來た。

豆菊は、いつもの座敷着とは、すこし袂のみじかい銘仙の着物を着せられて、髪まで、お下げ髪に改められてゐた。賢い彼女の眼も、すこし、きよとんとしてゐた。

「このお方が、おきく樣といふ、お末のお嬢樣でござりますか」

と、兩手をついていふ千坂家の老家令に、彼女はやはりきよとんとして、抱へ主の春太郎のそばへばかり寄つてゐた。

やがて、しめやかに、襖を閉てきつて、大隈伯の代理の人と、女將とが、何か細々といひきかせるうちに、豆菊はしゆく〳〵と泣き出した。

その心もちが分つたので、女將はまたせか〳〵と警察へ電話をかけた。話がついたといつて、急に馬車をいひつけて、豆菊も加へて、四人づれで伊勢佐木署へ出頭した。

熊膽との打合せに、さん〴〵手間がかゝつたらしいが、トム公はそこにゐること二時間ばかりで、一同へ下げ渡された。馬車はまた一人の客を容れて、そこから山手へ向つて鞭を打つた。

「分つてゐる？　赤十字病院だよ」

「分つてゐます」

「いそいでおくれネ」

女將は、こんなうれしい日はないといつて、涙をふいた。まつたく、うれしさうだつた。

豆菊が、お下げ髪に結つて、きちんと、銘仙の袂を膝に重ねてゐるので、トム公は、ぎごちなかつた。

髯の生えてゐるそばの人、紋付袴で謹嚴そのものといつた態度でゐるそばの老人、それも、鬱陶しいもの

だつた。

たゞ彼は、かうして公然と、母のゐる病院へ訪れ得ることがとても愉快であつた。一刻もはやく、冷たいだらうと思ふ母の手を、自分の頬べたに當てゝやりたかつた。

馬車はかなりな歩速で躍つてゐたが、馭者の鞭の敷がまだ少い氣がした。默つてゐるお菊ちやんだつてやつぱり同じだらうと思つた。彼は、妹の眼にいつぱいうるんでゐるものを見て、共に、眼を熱くしてゐる自分に氣づいた。

馬車は、うね〳〵と、黄昏の坂路にかゝつた。坂のうへに、灯が見えた。あれもこれも母の枕へにともる灯かと思はれた。——坂を登り切ると、軒は並木の下を縫つてゐる。

やがて、からたちの垣根が見えた。——夕暮の空に白いペンキ塗の赤十字病院が仰がれた。豆菊もトム公も、そこの窓の灯を見たとたんに、睫毛にぽうつとその灯が滲んでしまつて、幾ずぢとなく熱いものが、むづがゆく頬を流れてくるのも知らなかつた。

飛降り

「はい、御通知を拝見して、非常に驚いたわけです。で早速、病室も特別室の方へお移ししておきました

から」

通された病室は、雪の夜のやうに白々としてゐた。主治醫は、寢床に椅子をよせきつて、無言を守つてゐた。助手や看護婦たちの沈默にも、あきらかに、病人の危瀕を語るものがあつた。

「實は……」と、主治醫は三名だけを蔭へよんで「東京からの電報を拝見してをりましたので、極力、盡しましたが、遺憾ながらお待ちしきれなかつたのです。で……只今、注射をしましたから」

「どうも、萬、やむを得んことでございます」と、老家令は沈痛な低聲でいつた。

そばに、俯向いてゐた女將が、しゆくッと、嗚咽をして、突然、袖口をかみながら背を向けたので、二人ははつとして、寢床の方へ眼をふり向けた。

悲しい、嚴肅な光景が、人々の眼を衝つた。注射によつて、わづかな時間の生を意識した盲目の病人が、いつぱいに、からだに被つてゐる白い衣を、かすかにうごかしてゐる。ベッドの兩方から、トム公と豆菊とが、母の胸へ、頬へ、まるで泣いてもゐないやうに顔をすりつけて、ふるへてゐた。

細い、蠟細工みたいな指が、何ものかを、宙に探つた。トム公の髪の毛をつかんだのである。片方の手には、豆菊の背をつよく抱へよせて、異樣な、泣くとも歡喜ともつかない聲を、喉から洩した。

「あゝ!! わたしの罪だ。……女は」と、きれ〴〵だつた「貞操だよ! 貞操だよッ。……おつ母さんは」

すこし息をついた。然し、あわたゞしい死の督促が彼女の心臓をたゝいたらしい。

「ふたりとも、堪忍してね。……堪忍してね」

わッと、トム公がありッたけの聲を出して泣いた。

「おつ母あ……」

「お母あさん」

「おつ母あ。……おつ母あ」

「おつ、おつ……おつ母あさん……」

直立してゐた主治醫と看護婦とは、眼を見あはせてその枕元へ、無言のまゝ冷たい歩みを運びかけた。

× × ×

數日の後——

横濱驛のプラットホームは、今、新橋行の列車に駈けつける人々の騒音で慌だしかつた。

一等車の窓の外には、千歳の女將と金春の春太郎とが、送りに來てゐた。あとの處置はすべてよいやうにしておくといふこと。大隈伯によろしくといふこと。——そして、くれぐれも、二人のことをなどいふこと。

「いや、お坊ちやん、お嬢さまのことは、もう一切御心配はございませぬ。何事も、大隈の御前樣が、よいやうにして下さいませうから」

と、家令、代理の者、ふたりが謹嚴に帽子を脱いで勞を謝した。

五分鈴が鳴ると、女將は、のび上つて一等車のなかをのぞいた。華族のお孫になつてこれから東京の邸へ迎へられようとする豆菊とトム公とは生れ代つたやうに、品よく見えた。

「……ぢや菊ちやん、富麿さん、左樣なら」

汽車はゆるぎ出した。送りに來た二人のすがたは、プラットホームといつしよに、うしろへ飛んで行つた。

トム公はすぐに窓から首を出した。横濱の市街、横濱の港内が、彼のひとみに展開された。船渠の構内も瞬間、眼の下に見えた。

「——菊ちやん、うれしいかい？　華族の家へ貰はれてゆくんだとさ」

「わからないわ、私には」

「おつ母あ、何といつたんだつけ。——死ぬ時に」

「あやまつてゐたわ」
「どうして謝まるんだらう。自分の子供へ」
「よしてよ……」
「また泣くの。泣蟲」
「自分だつて、泣いたくせに」
汽車は、疾風を衝いてゐた。
トムは、ちらと窓外をのぞいた。
「あ、もう横濱は見えねえな」
「そんなことば、やめてよ」
「おまへ、もうお孃樣になッちまつたのか。早えなあ」
と、少し浮かない顔で、
「菊ちやんは、華族のお孃樣が似合ふよ。だが、おいらは嫌ひだ。金持もきらひだ。……あゝ、おつ母あが生きてゐれやいゝのになあ。おつ母あさなら、一生でも、かんかん蟲をしてゐた方がいゝ」

「よしてよ、そんなことば。トムさんが、かんかん蟲をしてゐたことなんか、これからいはない方がいゝのよ。千歳の女將さんもいつてゐたわ」
蟲音が變つた。汽車は、ひとつの川をうしろにしてゐた。
「おら、歸らう！」
「どこへ、兄さん」
「菊ちやん、あばよ」
トムはふいに、そばにあつた帽子をつかんで扉の外へ驅けだした。あッと、豆菊と付添の二人が、窓を開けたとたんに、トム公の矮短なからだは、激しい空氣の震動にもんどりを打つて、線路堤から沼地らしい蘆のなかに振り落されてゐた。
「帽子が見える！　帽子がッ」
豆菊のかなきり聲が、疾風にちぎれて、列車の黑煙といつしよに、後方へ飛んで行つた。

彼の航路

水族館の魚みたいに、懲治監の不良兒たちは、監禁室の底にへばりついて寢てゐた。青いガラス窓の外

にさつきから彷徨してゐる人影にも、なか〳〵眼がさめなかつた。

「オイ、鋲を抜けよ。鋲を抜けよ」

さういふ外の幻に、やつと、一人が眼をこすり出した。そして、ほかの者の耳を順々に引つ張り合つた。

「トム公だぞ。トム公だぞ」

「えつ、歸つて來たのか」

「ほんとか！」

「ほんとだとも！」

彼らは、疊の下の捻廻した持ち出して、忽ち一枚のガラス板を外した。トム公は、にこ〳〵しながら飛びこんで來た。彼は、からだぢうのポケットを探つて、手あたり次第に持つて來たものをそこへつかみ出した。アンパン、ハーモニカ、ピストル、煙草、洋刀、ドロップ。

「食へ、食へ、みんな。まだあるぞ、いくらでもあるぞ」

「偉いなあ、プリンスはやつぱり偉い。おいらのプリンス」

「約束どほり歸つて來たぜ」

「持つて來たぜ」

「ばんざい！」

あんばんの饗宴が始まつた。煙草の曲喫みが始まつた。餓ゑた中に物のあること！　人生のなかでおよそこんな感激的なことがあらうか。トムは、それを眺めてゐると、からだぢうを幸福でくすぐられるやうに欣しかつた。果した約束に、爽快であつた。

だが、その深夜の享樂は、大騒ぎは、當然監視人に發見されずにはゐない。トムはすぐに別室へ拉し去られた。東京の千坂家へ、大隈伯へ、また熊襲の力へ、十幾日間の交渉がかはされた結果、トム公はやはり放縱だつた母の血を多分にうけたトム公であつて、或る年齢までは、それを嚴格な監視の下におく必要があらうときまつて、八丈島の最不良兒感化院へ送ることになつた。

月に二回、横濱を出帆する八丈丸に、トム公は監視付きで乘せられた。もう海の寒い冬だつた。だがその朝は、港いつぱいに陽がさして、水蒸氣が水面にあつた。

「プリンス！　プリンス！」

トムは左舷に立つて、自分へさけぶたくさんなハンケチ女の群を見出して笑つた。お光さんはその中に立つて、白い手をさしあげてゐた。唇が届かない——トムはさう思つた。——唇が届かない。

また、男たちは、男ばかりで一團になつてゐた。愚連隊の連中である。警官もちらほら邊に見えるのに二重廻しを着て、あの黒眼鏡が、やはりトムを見送りに來てゐた。——だが、彼の最も滿足したのは、そこに、嬰兒をおぶつてゐる細君を連れて、龜田が來てゐることだつた。

ふとい汽笛の怒號が、霧をふらした。船は棧橋を置いて徐々に水紋の間隔をひろげた。

見送りの人影は、てんでに、口へ手をかざして、彼に餞別の「ことば」を送つた。トム公も、舷へのり出して、口へ手をかざした。

「——あばようッ」

港はいつぱいな陽あたりだつた。方々の船で仕事をしてゐるかんかん鎚の音がうらゝかだつた。トム公のために唄ふやうに、トム公のために晴れたやうに、かんかん日和を唄が流れた——

だが、少年期から次の成長へ向つて、彼に與へられたこの重大な航路が、よい環境に惠まれゝばよいが。

——もし惡い時だつて、誰も結果に責任を持つ者はないのだから。(終)

昭和十四年八月一日印刷
昭和十四年八月六日發行

「かんかん蟲は唄ふ」
（定價四拾錢）

著者　吉川英治

發行者　大阪市北區中之島三丁目三番地
株式會社朝日新聞社
樋口正德

印刷者　大阪市淀川區野原町一一八八ノ五
日本印刷製本株式會社
堀越幸

不許複製

發行所　大阪市北區中之島三丁目三番地
株式會社朝日新聞社

終

定價40セン